

◆大串 章選

春の夢三途の川を引き返す (志木市) 谷村 康志
 春の駅ピアノシヨパンを奏でをり (長久手市) 佐藤 昌江
 真ん丸や地球太陽しやぼん玉 (大村市) 小谷 一夫
 鯉のぼりこの子も何時か我を越す (奈良市) 田村 英一
 老いらくの恋は何色春の虹 (福島市) 安斎真貴子
 昭和歌謡流るる店や春惜しむ (大和市) 岩下 正文
 帰省子に父のふるまう新茶かな (大津市) 板垣 蚌珠
 春惜む卒寿となれば猶の事 (尾崎市) 田中 節夫
 初めての田舎暮らしや風薫る (尾張旭市) 石川 盛久
 旅人となりて故郷の春惜しむ (盛岡市) 福田 栄紀

【評】第1句。自分が亡くなる夢をご覧になったのですね。生きていてよかったです！第2句。駅ピアノでシヨパンの曲を弾いている。曲名は何だろう。第3句。絶大な「地球」や「太陽」の後に小さな「しやぼん玉」を並べたところがおもしろい。

◆高山れおな選

波音も月もどしこし磯遊び (東京都目黒区) 椿 泰文
 雨粒を乗るだけのせてクローバー (藤岡市) 飯塚 柚花
 ウエディングドレス白詰草を踏まぬよう (相模原市) 鹿野加代子
 マーガレットはいはいと手を上げる (横浜市) 込宮 正一
 名水で煮てかつ冷やす麦茶かな (大阪市) 上西左大信
 雉啼くや二代目の友廃業す (戸田市) 蜂巣 幸彦
 ふうの口して風車売りにけり (浜松市) 久野 茂樹
 新緑に見え隠れして隠れん坊 (古河市) 天野 一夫
 子雀に喰はるるバッタ青きまま (横浜市) 田名邊賢治
 九条も廊下に立てり令和夏 (大宰府市) 彦坂 正亨

【評】椿さん。この月は昼の月。季語は磯遊びで春。無窮の天地と儂い人事の対比という昔ながらの詠み口なのに意外なほど新鮮。続いては白詰草比べ。雨上りの葉にズームインする飯塚さん。結婚式での一コマに新婦の人柄を捉えた鹿野さん。

◆小林貴子選

独り居に些事の多さや五月晴 (川崎市) 上山 暢子
 スローバラード忌野清志郎忌 (熊本市) 今村 梢火
 新茶売ることば優しき町にかな (静岡河津町) 岩城 紀子
 夢奏むこともありなん新社員 (仙台市) 柿坂 伸子
 連休も仕事してゐる蚕 (東京都大田区) 川瀬 佳穂
 いそぎんちやくほのおほらかさも欲しく (東京都練馬区) 藤森 狂吉
 草も木も芽吹き地球の産毛めく (取手市) 御厨 安幸
 どの木にも志ある松の芯 (豊田市) 内山 幸子
 行く春のうしろ姿やパンを焼く (高槻市) 山岡 猛
 産道かにホルムズ海峡麦の秋 (松本市) 竹内 齊

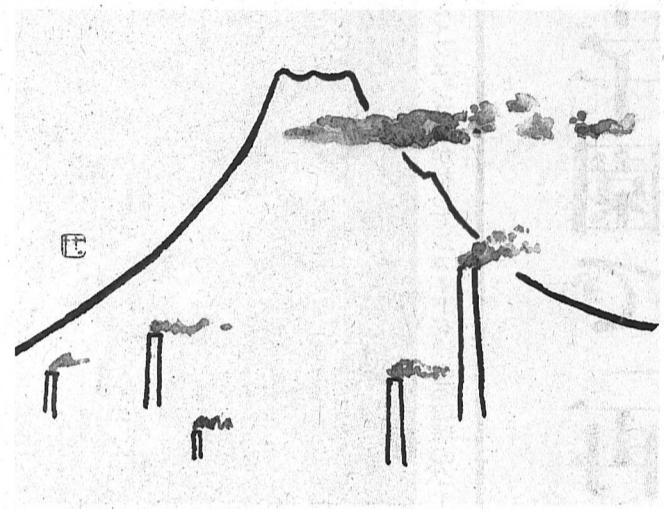
【評】一句目、些事は面倒だが、五月晴なら気分も晴れる。二句目、忌野清志郎の忌は五月二日、残された曲を聴こう。三句目、言葉の優しい町とはぜひ訪れてみたい。四句目、そういうこともあるだろうが、夢のふくらむ日もきっとまた来る。

◆長谷川權選

乳がんと闘ふ初夏のかがやけり (天童市) 高橋ゆり子
 夏草やわが家の沈みゆくばかり (玉野市) 勝村 博
 飛ぶまいと蒲公英の架風の中 (横浜市) 木村 和子
 春雷やイラン革命防衛隊 (東京都世田谷区) 野上 卓
 亀鳴いて外国人を驚かす (守谷市) 若林 澄夫
 戦争やいつか轟るだけの星 (横浜市) 三玉 一郎
 ロボットとともに労働袋掛 (葛城市) 山本 栄子
 おさなごの茶碗の中は花の屑 (豊川市) 河合 正秀
 咲き残る花のいい訳風が聞く (高崎市) 松島 律子
 傘差してスッポンの恋に見入りけり (宮崎市) 池江 諭

【評】一席。美しい五月の輝き。がんと闘う命の輝き。二席。原句は「廢家」。「わが家」とするほうが世界が深い。三席。必死に風に耐えている。作者だけがわかるタンポポの架の思い。十句目。妙なものがなぜか気になるのだ。つくづく。

朝日 俳壇 歌壇



〈雲と煙—新幹線の車窓より—〉北村さゆり

◆川野里子選

目の見えぬあなたの連れし幼子は全ての爪の
 切り揃えてあり (さいたま市) 橋 圭
 指差しを不意にはじめた子の指のゆぐえを母
 は息止めて追う (神戸市) 浅田 拓史

母だ。二首目、何を指しかな構図が鮮やかな色まゆようとするひととき。

◆佐佐木幸綱選

そこそこに見慣れぬ車と子どもらの突如あら
 われ田植えの季節 (松阪市) こやまはつみ
 桜にも老いと死があり改めて知る倒木のニユ
 ースを受けて (鎌倉市) 丸尾 啓敏

ような表現で、結句で種の倒木のニュースが多く新。

◆高野公彦選

美しき日本語つかひ抒情歌を詠みたし岡野弘
 彦のやうに (岡山市) 寺谷 和子
 耕松機エンジンの音観自在菩薩行深と唸って
 動く (埼玉県) 高柳 茂

歌。2首目、濁音の多い面白い。3首目、私を覚葉の力を信じてデモに。

◆永田和宏選

エレベーター開けば奴の通夜の席息を吐き切
 り一歩踏み出す (東京都) 本橋 正敏
 知っているつもりで実は知らぬのは親子と
 じ憲法のこと (筑紫野市) 二宮 正博

一歩を踏み出すまでの途んだことがないという人、サディスティックか？

短歌時評

「世代」と「時代」

山崎 聡子

角川短歌5月号の特集「四十代の担うもの」で、執筆者たちが世代論の難しさを指摘していることが印象に残った。この世代が就職氷河期世代、家族観・ジェンダー観などが変容していった狭間の世代との見方は間違っていない。しかし、社会象と個人との関係には濃淡があり、作品はつねに時代のために書かれているわけではないことは念頭に置きたい。

三月の採光窓を雪は過ぎ彼らの彼女らの婚姻よ (霧島あきら)

おひなさま二体を紅蓮の炎に焚いて娘はあわせに暮らしています (畑谷隆子)

まつてくれなにも俺たちを食べてどうするこくみんだよ蛙だよ (平井弘)

国民的アニメを国はあといくつ受けとめることができるだろう (我妻俊樹)

短歌研究5・6月号「300歌人新作作品集」から引いた。本特集は性別・年齢順の掲載を数年前に五十音順に改めたが、そこで露わになったのは、世代の括りが消えたとき、「時代」が読みで反映されることだ。霧島の「彼らの彼女らの」からは婚姻を享受できない人々への心寄せを、畑谷の歌からは婚姻が縛り付けてきたものの存在を読み取れるかもしれない。また、平井・我妻の歌からは国と国民の互解した関係を重なることも可能だ。一方、時代の共通項を見出すことは、読みを恣意的に曲げることとも紙一重だ。霧島と畑谷の歌における「婚姻」への距離感の違い、戦時下に幼少期を送った平井が描く不気味な声について考えつつ、個別の表現の必然性を深掘りするこの大切さを再確認したい。(歌人)

第4回稲畑汀子賞 日本伝統俳句協会の主催。高知市の伊野部哲也さん(72)の句集「永永無窮」(文学の森)と千葉県市川市の抜井諒一さん(44)の句集「残影」(角川書店)に決まった。

第17回田中裕明賞 ふらんす堂主催。東京都港区の板倉ケンタさん(26)の句集「一花一虫」(ふらんす堂)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

